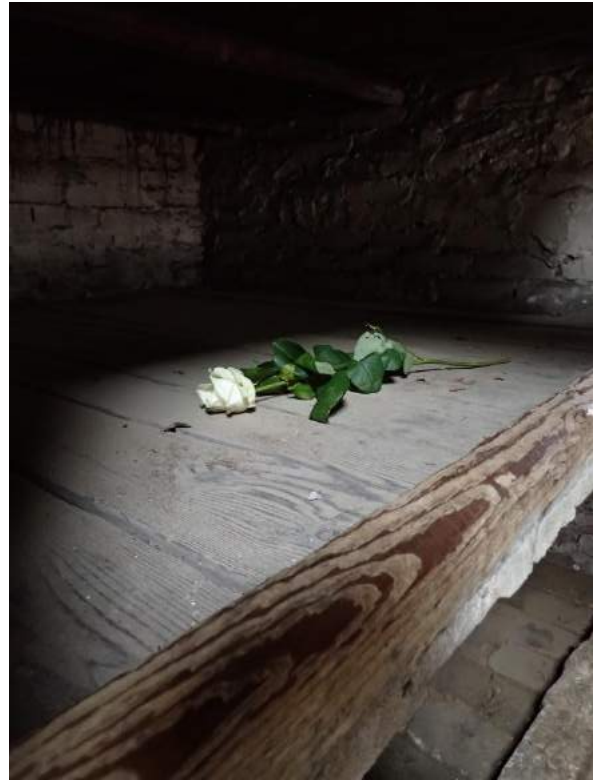


# 教育活動活性化提案事業 による海外研修報告書

事業名：「グローバル」人材としての  
教養修得 ―ホロコーストの歴史を  
学び、記憶の継承に参画する―

2019年3月11日  
国際教養学科 吉田信



アウシュビッツ・ビルケナウ収容所跡のバラックにて

## 目次

### はじめに

1. 研修の概要  
日程, 目的地, 参加者
2. 研修目的
3. 事前事後対応
4. 研修に対する参加者のフィードバック  
K. Y., I. N., 萩野絢子
5. 今後の研修に向けた課題  
人数・予算・期間・研修プログラム

6. 研修記録

7. 参加学生による報告書

## はじめに

2018年度教育活動活性化提案事業の助成を受け、2019年2月18日より28日の間、以下の内容で海外研修を実施し全員無事帰国しました。今回の研修を実施するにあたりご支援くださった本学関係各位に感謝の意を表します。

## 1. 研修の概要

### 日程

2019年2月18日～2月28日

### 研修目的地

ポーランド（クラクフ，ワルシャワ），ドイツ（ベルリン）

### 研修参加者

N. E.（直前の事故により不参加）

K. Y.

I. K.

萩野絢子

M. N.（ポーランドのみ参加）

Y. K.（ワルシャワ大学留学中，ワルシャワ現地案内）

\*K. Y.， I. K.， 萩野は全行程参加。M. N.は研修内容に関心を抱き，別件でヨーロッパ訪問予定があり，日程の都合のつくポーランドのみ部分参加。Y. Kは，本学よりワルシャワ大学に派遣されていた交換留学生で，ワルシャワの現地案内を依頼した。

## 2. 研修目的

国際化を推進する本学として，ホロコーストに関する実地研修を行い，その理解を深めることにより国際的な教養を身につける。これが今回の海外研修にあたり定めた目的である。

ホロコーストをテーマとした理由としては，戦後国際社会の方向を決めた重要な出来事であったこと。本学協定大学においてホロコースト関連の講義が開催されていること。現在のヨーロッパ社会において顕著な現象となっているネオナチの起源，反ユダヤ主義の背景を理解するためにも必須事項であること。日本においてホロコーストの歴史への無知，軽視が近年国際的に問題となっていること。最後に国際関係コースで開講している私のゼミのテーマでもあることが理由である。

海外研修を実施するに際しては，今後の本学での教育活動へどう活用できるのか，体験学習化するのか，あるいはコースもしくはゼミの範囲内で継続的に実施するのかを念頭に引率した。研修目的の詳細については，本事業の申請時に提出した申請書類を参照いただ

きたい。

### 3. 事前事後対応

研修に参加した学生のうち、全行程参加した K.Y., I.K., 萩野の 3 名は私のゼミ生でもあり、1 年間ホロコーストに関する学習をゼミで集中的に行ってきた。しかしながら、現地では博物館、記念碑を漫然と訪ねることにならないよう、研修参加にあたり各自研究テーマを一つ設定し、研修中にそのテーマに関する理解を深め、帰国後に報告書の執筆を課した。さらに、受け身の研修旅行、すなわちガイド付きパッキングツアーになることを避けるため、ワルシャワ、ベルリンでの訪問先については大枠をこちらで指示したうえで、学生に自ら計画を立てさせることとした。

### 4. 研修に対するフィードバック

研修に参加した学生のうち、全行程参加した上述の 3 名に研修の良かった点、改善点、期間、予算、人数について意見を寄せてもらった。

#### K.Y.

今回の研修の良かった点

- ・色々な人と交流できて楽しかった！特にクラクフのお家訪問は良かったです。
- ・ホロコーストについて色々な考えや認識が深まった、やはりその場に足を踏み入れることって大切だなんて思いました(文献や写真だけじゃなくて)

改善点

- ・英語力がない為に、やや博物館読むのが大変。ワルシャワ蜂起博物館が特に分からなくて困りました
- ・来年はアウシュビッツのガイドなしで大丈夫だと思います
- ・ホテルの確認をしっかりとしておく
- ・英語力あれば、もっとマルテとかワルシャワ大学の優さんのお友達とも会話出来たんだらうなという個人的な反省。きっと喋る力があれば、もっと色々得るものあったらうな。
- ・荷物は軽くしとく(移動が大変、ゲストハウスやアパートメントの多くはエレベーターない)

費用

- ・全然私的には問題なかったです！

人数

- ・これくらいじゃないと、移動が大変だと思います！ ترامとか！5人位までじゃないでしようか、、、

期間

・費用が許すならもっと滞在したほうが、もっと色々な所に足を運べたし、ゆっくりと博物館見れます

今後も継続した方がいいか

・ゼミ生が行きたいという意志があるなら絶対に継続すべきです！私たちみたいに、行きたい人や行ける人を募って、、、

I. K.

・研修に参加して良かった点

これまでゼミで学んできたことが、現地の博物館などで展示されている情報と合っている部分が多く、もし知らなかったらついていけなかっただろうと思った。

・改善点

ベルリンで宿泊したホステルの地域の治安や雰囲気や事前にもっと調べておくべきだったと思った。向こうについていきなりロマの洗礼をうけてすごく緊張したので

・感想

費用、人数、日数はちょうど良かったと思います。ただ、帰国してからすぐ就活という時に時差ボケに悩まされたので、春休み入ってすぐとかに行くのが良かったかなあと思いました！こんな機会がないと絶対にできない経験たくさんできたので、継続した方がいいと思います！

萩野絢子

良かった点

- ・少人数だったので、質問などをすぐ聞けました。
- ・先生が近くのアパートメントに居てくれたので安心でした。
- ・クラクフの学生さんたちと交流できたのがとても良かったです。

改善点(私たちの反省点)

- ・ホテルや交通機関、ご飯屋さんなど事前準備や下調べが不十分でした。
- ・情報量がかなり多かったので、早めにスケジュールを立てて、博物館とかは事前に少し予習しておいた方が良かったかなと思います。

とても充実したツアーだったので全体としての改善点は特にはないです

私たちの準備不足から起きたトラブル等は来年の子たちに沢山話して注意喚起してあげてください！

費用：今回ポーランド滞在の方が長く、滞在費を抑えられたのは良かったと思います。

期間：気持ち的にはもっと長く！とは思いましたが、体力的に丁度いい期間でした。

人数：ゼミ生の数は丁度良かったです。あと+1名くらいでも大丈夫だと思います。

ただ、ホロコーストを事前に学習してない人は内容的に理解が難しいかもしれないです。

本当に行って良かったと思えるツアーでした。次のゼミ生にも是非経験して欲しいなと思います。

## 5. 今後の研修に向けた課題

規模と質の問題のバランスをどう取るか。財源をどう確保するか。研修の課題はこの二点に尽きると改めて感じた。

人数：今回の参加人数（全行程参加の3名）に引率者を加えようとちょうど4名であり、移動に最適な人数であった。また、食事の際にも都合がよく、途中行程参加の学生、現地に留学中の本学学生及びその知人を加え9名となったワルシャワでの夕食では、レストランの手配に手間取った。1名の引率者で対応できる数としては、おそらく最大で6~7名程度ではないだろうか。海外体験学習化を念頭に10名を超える参加者を想定するのであれば、最低でも2名の引率は必要である。さらに引率者が男性である場合、体調の微妙な変化など気が付かない点もあることも想定できるため、もう一名は女性の引率者であることが望ましい。移動と食事、引率の問題が参加者の数に密接に関わってくる。

予算：当初研修参加希望を表明していた学生数は10名を超えていたが、航空運賃、滞在費など総経費が固まるにつれ4名まで減った（目安として35万円）。冬のオフシーズンであり、またポーランドは比較的物価も安く、ある程度経費を抑える配慮はしたつもりではある。次年度の実施に際して、引き続き検討すべき項目である。なお、学内の他の競争的資金と併用ができないことから、個人研究費、教育実習費など本来は別の目的に支出すべき予算も割かざるを得ず、加えて引率者の自己負担も相応の額になった。

期間：3都市を3泊ずつ。ベルリンは実質2日しか使えなかったこともあり、世界有数の博物館を素通りせざるを得ないなど、ベルリンの滞在日数を1~2日延ばす余地はあるかもしれない。しかし、その分物価の高いベルリンでの支出が増えることにはなる。

研修プログラム：現地学生との交流やドイツ人研究者による案内も盛り込み十分といえる内容を準備した。むしろ、学生が典型的な観光スポットの訪問にこだわらず、この研修内容にある程度満足してくれたことは予期せぬ反応であった。

## 6. 研修内容

2月18日：福岡空港合流、成田空港へのフライト。ポーランド航空に乗り換え出国。ワルシャワで国内便に乗り換え、クラクフ空港到着。空港からは鉄道にてクラクフ中央駅まで移動。中央駅から宿泊先まで徒歩移動。学生の手配したアパートの鍵の受け渡しがいかにうまくいかなかった、別の宿泊先を急遽手配することとなる。

2月19日：ヤギェウォ大学の学生3名と合流。クラクフ市内を案内していただく。彼等はヤギェウォ大学で日本語を学んでいる学生である。今回、ヤギェウォ大学の Olga BARBASIEWICZ 先生に尽力いただき、先生のもとで学んでいる学生を紹介していただいた。

学生の案内で旧市街の中央広場を見た後、徒歩にて旧ユダヤ人地区を訪問。途中、ユダヤ人墓地を経由し、ドイツ占領下で墓地が荒らされた状況や、現在の復興について説明をしていただく。その後、現在博物館となっているシナゴグ（ユダヤ教の教会）を訪問する。館内にはクラクフにおけるユダヤ人の歴史が解説されたパネルが展示されており、中世からの街の発展とユダヤ人の関わりが詳しく説明されているが、学生は英文説明の読解に苦慮していた。これは、研修全体を通じて見られたことであり、今後同種の研修を実施する際の課題である。

シナゴグ見学後は、クラクフ・ゲッター跡を訪問する。ナチス・ドイツ占領後にユダヤ人地区の外にゲッターが設けられ、現在でもごく一部であるがゲッターの壁跡が残されている。ここを見学した後に、映画『シンドラーのリスト』でもロケに使われたシンドラーの工場跡を訪問する。ここは、現在ではクラクフ市の歴史博物館として転用されており、クラクフ市の歴史が近世から第2次世界大戦後まで多くの展示品と共に解説されている。

引率者の私が4年前にクラクフを訪問した際には、ユダヤ人墓地とゲッターの壁跡は訪ねることができなかった。現地在住の学生の案内でないとたどり着くのが困難な場所でもあり、今回の案内をありがたく思った。

その後、ヤギェウォ大学の学生宅まで移動し、ご家族とともにポーランド料理のごちそうにあずかる機会を得た。ボルシチに似たスープ、餃子に似たピエロギ、キャベツの酢漬けなど、われわれ日本人の口にも馴染む食べやすい料理が多かった。訪問した学生宅は、祖母、父母、姉と案内してくれた学生の合計5人が必ずしも広くないアパートに暮らしていた。英語、日本語、ポーランド語が飛び交う状況で、学生は日本語で対応していたもののヤギェウォ大の学生が通訳してくれたこともあり、楽しいひとときを過ごすことができた。ショート・ホームステイの後は旧市街に戻り解散となった。



女子大トートを持つヤギェウォ大学生と



ショート・ホームステイ先での1枚

2月20日：朝からバスでアウシュビッツ収容所まで移動。アウシュビッツ収容所では、日本語ガイドの都合がつかず、英語ガイドを利用し、ガイドの説明を私が適宜通訳しながら見学することとなった。アウシュビッツ収容所は、第1収容所、ビルケナウ収容所の2箇所が残っており、見学に要する時間も詳細に回れば1日以上かかる（特にビルケナウの敷地が広大なため）。今回は午前10時開始の3時間30分のツアーを申し込んだ。見学のほとんどが戸外での見学になり、冬期は長時間の見学に耐え得ないこと、通訳に要する時間も勘案してこのツアーを選択した。

展示施設は、収容された人々が射殺された刑場、拷問の跡などに加え、おびただしい数の犠牲者の遺留品（髪の毛、メガネ、食器、カバン等）の展示が続き、ひたすら圧倒される。アウシュビッツ第1収容所の見学後、シャトルバスでビルケナウまで移動する。ビルケナウでは有名な収容所ゲートの脇を通り敷地に入り、ガス室と焼却炉跡、僅かに残っているバラックを見学した。ガイドの説明でとりわけ印象に残ったものとして、アウシュビッツの生存者が確実に減っていることに関する説明があり、ホロコーストという人類史上未曾有の出来事について、その生存者がいなくなった後、どのように人類はその記憶を伝えていくことができるのか、研修の中核をなす課題を突きつけられた感があった。

時間的には余裕があり昼食後にビルケナウ収容所跡の施設跡を訪問することも可能であったものの、やはり冬の戸外での見学のため長時間の活動は難しく、バスでクラクフ旧市街に戻り、旧市街の広場に建つ聖マリア聖堂、織物会館を訪ねた。一旦解散後、再度合流して夕食を取りこの日を終えた。



ビルケナウ収容所訪問



アウシュビッツ第1収容所焼却炉跡

2月21日：朝から空港に移動し、ワルシャワ行きのフライトに搭乗。ワルシャワ空港では本学からワルシャワ大学に留学中の Y.K. さん（国際関係コース）が迎えに来る。今回の研修では、単に日本から本学学生を引率して各地を訪問するといったパックツアー方式に陥



ることを避けるため、留学中の学生も間接的に関与させることで留学先の都市の歴史への理解を深めてもらうことを企図して、ワルシャワの現地案内を依頼した。現地案内を依頼するにあたっては、こちらの訪問の目的を伝え、事前にプランを作成してもらっている。

当初、旧市街を散策する予定であったが、当日の天候が優れなかったこともあり、予定を変更し、ワルシャワ蜂起博物館を訪問する。ナチス・ドイツ占領末期にワルシャワ市民が蜂起したワルシャワ蜂起については『国際政治史』の講義でも取り上げており、講義内容を想起させつつ学生と展示をまわることとなる。

その後、遅めの昼食（ポーランド料理）をとり、宿泊先に荷物を置き再度合流して夕食をとった後、翌日に備え早めに解散。

2月22日：天候に恵まれたこの日は、ほぼ一日戸外の見学に費やすこととなる。まず、ワルシャワ・ゲットー跡を經由し、ゲットー壁跡を確認した。ワルシャワのゲットーはナチスが設けたゲットーでも最大級の規模をほこり、ゲットー内での活動については近年その詳細が明らかになってきつつある。その後、シナゴグを訪問、さらにユダヤ人墓地を訪問してホロコースト犠牲者の墓を訪ねる。犠牲者の墓碑の生没年からは、若年でユダヤ人迫害の犠牲となったこと、墓前の供え物などからは縁者の有無などを推測することができる。

ユダヤ人墓地訪問の後は、世界遺産にも登録されているワルシャワ旧市街を訪ね、ワルシャワ蜂起への報復としてヒトラーが殲滅を命じた旧市街の復興を目近に確認することができた。また旧市街への途上、本学学生が留学しているワルシャワ大学も訪ねた。シヨパンも父親の仕事の都合でキャンパス内の施設に居住していたという史実が示すように、瀟洒な校舎に歴史の厚みを一同が感じる機会となった。



ワルシャワ・ゲットー壁跡



ワルシャワ旧市街王宮横広場

2月23日：ワルシャワのユダヤ歴史博物館を訪問する。この日は、本学の国際関係コースからワルシャワ大学に留学している野上千佳も合流した。ワルシャワのユダヤ歴史博物館

はポーランドのユダヤ人の歴史を中世から今日まで膨大な量の史料とインタラクティブな展示で構成した博物館であり、当初午前中のみの訪問として、午後は旧市街を観光予定であったところ、大幅に予定を超過したため、この博物館見学に一日を費やす結果となった。

研修目的との関連では、19世紀末からのポーランドでの反ユダヤ主義の興隆を詳しく知ることができただけでなく、ワルシャワ・ゲットーに関する詳細な展示によりドイツ占領下のポーランドでのユダヤ人政策についてゼミでは知り得なかった情報に接することができた。なにより学生がしっかりと展示を見たいとの意欲を示していたこともあり、必要に応じて適宜解説を加えつつ博物館を回った。

2月24日：午前中はワルシャワ市内を簡単に観光し、午後からベルリン移動。

2月25日：午前中ヴァンゼー湖畔を訪問。ナチス・ドイツがユダヤ人問題の「最終解決」（＝絶滅）を決定した会議の開催された館を訪ねる。現在は博物館となっており、ヨーロッパでの反ユダヤ主義の歴史を19世紀末から展示し、その流れにナチス・ドイツの反ユダヤ主義政策を位置づけるという展示コンセプトに則っている。保養地として戦前からベルリン市民の憩いの場であったヴァンゼー湖畔は、現在でも穏やかな湖面を吹きぬける風の心地よさが和やかな気分させる土地であり、他方そこで起きた会議の結末とのコントラストに思いを馳せるとき、ナチスの持っていた特異な美学を改めて感じさせる場でもあった。

午後はベルリン市内に移動し、ポツダム広場からT4作戦跡を訪ねる。T4作戦とは、障害者に対するナチス・ドイツの「安楽死作戦」の暗号名であり、ナチスによる障害者、同性愛者、ロマといったマイノリティに対する抹殺を遂行した作戦である。このマイノリティに対する迫害は、ここ20年ほどで関心が寄せられ、検討されるようになった重要なテーマである。とりわけ、障害者に対する差別・虐殺を生み出す要因である優生思想は、ナチ敗北後の戦後国際社会でも根強く生き延び、日本のらい予防法・それに基づく強制断種に継承された極めて今日的なテーマでもある。今回の研修に参加した学生にもT4作戦に関心を寄せていた者もあり、施設跡などは残っていないものの、追悼の記念碑が建立され、説明のパネルが展示されている（ベルリン・フィルの本拠地、フィルハーモニーの敷地内にある）。

次に「テロのトポグラフィー」と呼ばれるナチス親衛隊（SS）、秘密警察（ゲシュタポ）による政治犯、ユダヤ人に対する残虐行為を展示した博物館を訪ねる。この博物館は、ユダヤ人及び政治犯を拘束、監禁、あるいは処刑をおこなったゲシュタポ跡、さらには冷戦時のベルリンの壁跡に建つ博物館であり、ナチス時代から冷戦へつながる歴史の展開が可視化された場でもある。

その後、ユダヤ博物館を訪問。ベルリンのユダヤ博物館はユダヤ系アメリカ人建築家、ダニエル・リベスキンドによる設計で、独特のコンセプトに基づく展示を行っており、説

明を受けた学生はそのコンセプトに強い印象を受けたようである。



T4 作戦跡の記念碑とパネル展示



ベルリンの壁跡にて

2月26日：午前中は宿泊先近くの旧政治犯収容所跡を訪ねる。元来刑務所であった施設をナチス時代に政治犯収容所として転用，多くの政治犯をギロチンにより処刑し，連合軍による空襲で一部施設が損壊した後は首吊りにより処刑した場所である。通常ユダヤ人に対する大量虐殺にのみ目が向きがちであるが，ここを訪ねることで，ナチスの政治体制に反対したドイツ人，占領地区で反ナチスの運動を展開した人たちも数多く犠牲になっていることに目を向けてもらうことを意図した。そうした犠牲者の追悼施設を訪ねることで，ナチスに対する抵抗運動の広がりについて理解することができることもあり，施設を訪問したのである。

昼近くにベルリン市内に移動して，既知のドイツ人研究者であるアンドレアス・ヴァイス氏とブランデンブルク門で合流。ヴァイス氏の案内により市中心部の関連施設を訪ねていった。まずは，冷戦崩壊，ドイツ統一後にベルリンの中心部が巨大な都市開発の対象となったが，その目玉施設としてコール政権期に設置されたものが，ホロコースト記念碑である。ユダヤ系アメリカ人建築家ピーター・アイゼンマン設計の記念碑は，墓石のような黒い石棺が並ぶ地上部分と，ナチスのユダヤ人迫害を展示する地下の展示スペースから成り立っている。ここでの展示の注目すべき点としては，それまで訪ねた博物館のパネルによる解説とは異なり，生存者の証言，あるいは犠牲者の存在を訪問者に意識させる展示に



工夫が凝らされていた点である。生存者の証言は収容されていた収容所と関連付けられ、ナレーションにより読み上げられていく。あるいは、犠牲者については、その氏名、生没年などが読み上げられていく。これは、訪問した学生の一人に非常に強い印象を残していた。

ホロコースト記念碑訪問後、昼食をはさみ、同性愛者の記念碑、ロマの記念碑を訪ね、ドイツの首都ベルリンの中心部（いずれの記念碑もブランデンブルク門、連邦下院議会近く）でナチス時代の犠牲者を追悼する記念碑が建立されていることの意味を考えるきっかけとなった。ヴァイス氏の案内により、中心部にかつて存在していた総督府官邸跡、内務省跡といった歴史上の重要な施設に関する説明を受けた。さらに、森鴎外のベルリンでの下宿先を通り過ぎ、新シナゴークを訪問した。このシナゴークではベルリンのユダヤ人の歴史が展示されており、水晶の夜で略奪を受けながら現在までその一部をとどめているシナゴークの歴史的意味を考える場となった。

ベルリン市内を歩くと路上に「躓きの石」と呼ばれるプレートを見出すことができる。これは、ナチの迫害を受けたユダヤ人が迫害前に住んでいたかつての旧宅前に埋め込まれたプレートである。ユダヤ人に対する虐殺は前例のない規模で行われたこともあり、親類縁者を含め広範囲にナチの犠牲になった家族が多い。それら犠牲者を偲ぶ者はこの世になく、彼等の生きた証をこの世で確かめる親類縁者はいない。それら忘却の彼方に過ぎ去っていく犠牲者を偲ぶための試みとして近年始まったプロジェクトがこの「躓きの石」である。学生のひとりには、かつて『現代ヨーロッパの政治と社会』講義でこの「躓きの石」について言及したことを覚えており、熱心に写真に収めていた。



躓きの石



ホロコースト記念碑

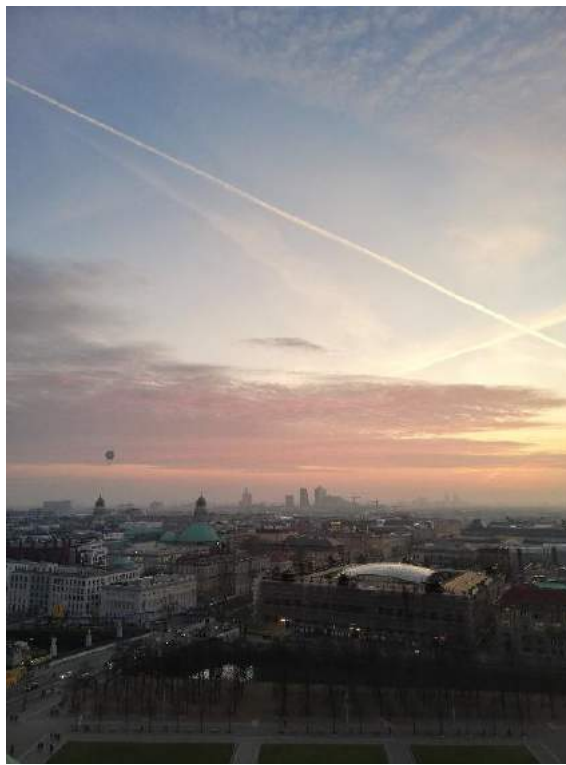
蹟きの石には、かつてそこに住んでいた人物の氏名、判明した限りで生年月日、強制移送先と移送年月日、その後の出来事が刻まれている。この蹟きの石の場合、兩名ともにアウシュビッツ収容所に移送された年月日、さらにそこで殺害されたことが刻まれている。殺害の正確な年月日はこの兩名の場合、明らかではない。

ベルリンでの最後の訪問地となったベルリン大聖堂は、今回の研修に際して学生が唯一、観光地らしいスポットとして選んだ施設である。しかし、それとて統一したドイツ帝国の歴史を象徴する大聖堂であり、ドイツ帝国の統一はドイツ史においてナチスへとつながる現代史の出発点でもある。そのことはヴァイス氏の案内からも明らかであった。

ベルリン大聖堂の堂上からはベルリン市街を一望できる。研修の締めくくりとしては出来すぎの感のあるベルリンの黄昏を堪能した私達は、その後ヴァイス氏の案内で訪ねたドイツ料理店でベルリンの味を堪能して海外研修最後の夜を終えたのであった。



ベルリン大聖堂を背に、ヴァイス氏と学生



大聖堂からの黄昏

